

論文要旨

学位論文題目 中近世染織品の基礎的研究

氏名 山川 暁

染織品を対象とする研究領域としては、染織史のほかに、服飾史や被服学など幾つかの分野を挙げ得るが、共通する研究対象に対して染織史のみが有する固有の分析方法とは何であろうか。博物館の染織担当学芸員として、作品そのものと向き合う時間を重ねてきた私は、それは歴史的な染織品そのものに触れなくてはできない研究、つまり作品それぞれの詳細な基礎データを取り、それらを蓄積して解析し、染織品のどこに時代や製作地を見極める要点が潜んでいるかを摘出する作業であると確信する。その要点を見極めるうえで、重要な指標となるのが基準作である。本論では、基準作を比定し効果的に分析するための方法論について検討するとともに、関連文字資料や絵画資料が存在するなど、基準作の要件を有する中近世染織品について、細部にわたる基礎データを紹介しながら、個別の事例研究を三章にわたって展開する。

まず第一章「染織史における基準作の比定と分析」では、基準作を比定し、それを分析するための方法についてまとめる。第一節「染織史における基準作の比定とその分析方法」においては、これまでの研究史を、何を根拠に基準作を定めてきたかという観点から振り返り、関連文字資料の存在、科学的な調査に拠る年代測定、関連絵画資料の存在の三種を比定の要件として見いだした。そしてさらに、基準作を編年基準として応用するための分析方法として、五種の手法を提示した。続く第二節「織物構造分析の歴史と方法 —美術史研究への応用のために—」では、これら五種の手法のうち、染織品研究にとって最も基礎的な方法論でありながら、日本においては研究が進んでいない織物構造分析を取り上げ、その研究史と手順を紹介した。いわば、第二章、第三章において展開する基準作の事例研究において、論者が拠ってきた方法論の基礎を総括する内容である。

第二章「中世の染織 —伝法衣の虚実—」は、中世の染織品のうち、所用者の名とともに伝えられるため基準作となりうる作例が数多く存在するにもかかわらず、これまで詳細に研究されてこなかった禅宗の袈裟、伝法衣についての事例研究である。第一節「禅と伝法衣」では、伝法衣を基準作として認定するために重要な関連文字資料、絵画資料に見る虚実について考察し、事例研究を始めるうえでの留意点を確認する。第二節「伝法衣の日本への移入 —東福寺の伝法衣にみる—」は、東福寺に伝えられた開山である入宋僧・円爾（一二〇二～八〇）所用品を中心とする五領の伝法衣の、第三節「威信財としての袈裟 —南浦紹明所用袈裟をめぐって—」は、入宋僧・南浦紹明（一二三五～一三〇八）所用とされる伝法衣の事例研究であり、伝承の精査とともに作品そのものの分析を通じて、それらを東アジアの禅宗史および染織史の中に位置づける。

第三章「近世の染織 —衣裳から広がる世界—」は、新出あるいはこれまで詳細な調査が及んでいな

かった、近世の染織品の基準作について取り上げる。第一節「新出の古沢巖島神社所蔵能装束と高野山下の神事能」は、慶長十五年（一六一〇）という年紀をもつ目録記載品とともに発見された能装束について、第二節「新出の近世初期衣服二例 一伝徳川家康着用 具足下着と肩衣一」は、慶長八年（一六〇三）拝領と箱書された箱内に納められていた衣服について、第三節「つなぎとめられた縁 一円照寺蔵 葡萄棚文様小袖地打敷からみる世界一」は、裏面に東福門院和子（一六〇七～七八）の女房であった阿波寄進との銘文を有する打敷についての事例研究である。いずれの事例においても、染織品を同時代の作品の中に位置づけることによって関連文字資料の語る製作年代を確認するとともに、可能な限り、それぞれの作品が本来機能していた世界を復元する。

以上のような構成で、本論では、染織史において基準作を比定し効果的に分析するための方法論に則りながら、作品の基礎データの公開が進んでいない中近世染織品のうち、関連文字資料や絵画資料が存在するなど、基準作としての要件を有する染織品に対する基礎研究を基盤に、そこからどのような発展的研究が可能であるかを示す。